

もはや、そのときのわたしには、「信ずる」ということが、一切できなくなっていたのである。二十三歳の年まで、信じきっていたものが、何もかも崩れ去った敗戦の日以来、わたしは、信ずることが恐ろしくなってしまった。(23頁)

あの戦争中に、わたしたち日本人は天皇を神と信じ、神の治めるこの国は不敗だと信じて戦ったはずではないか。信ずることの恐ろしさは、身に徹してははずではないか(79頁)

わたしはその時、彼のわたしへの愛が、全身を刺しつらぬくを感じた。そしてその愛が、単なる男と女の愛ではないのを感じた。彼が求めているのは、わたしが強く生きることであって、わたしが彼のものとなることではなかった。(66頁)

わたしの生に対する不安が、結婚によって、男の胸に抱かれることによって、解決できるように考えている人は、それはわたしという人間を愛していることにはならないのです。(94頁)

人間は、見たところしあわせそうに見えたとしても、必ずしもしあわせとは言えません。(124頁)

信頼されているということが、どんなに恐ろしいことかを、この教師は知らなかったのだ。(139頁)

ほんとうに人を愛するということは、その人が一人でも生きていけるようにしてあげること(158頁)

罪の意識がないということほど、人間にとって恐ろしいことがあるだろうか。(173頁)

罪の意識がないばかりに、わたしは自分の心が触はまれていることにも気がつかないのでは(175頁)

「神様、わたしの命を堀田さんに上げてよろしいですから、どうかなおしてあげて……」(243頁)

3. 絶対者なる神、戦争否定＝平和のために必要な神を信ずる

三浦文学は、戦争体験者いや軍国教師として命を惜しまずに戦争に協力した彼女自身の罪責感、平和への熱き願いが貫いている。戦争に何ら抵抗することのできなかったどころか、積極的に協力したクリスチャンの無力感を嘆いただけでなく、平和だけは絶対に守らねばならぬことを前川正は語った。

彼女は、人間思想としての平和論を超える、言い換えれば戦争を起す人間の愚かしい罪を否定させる絶対者である神が平和には必要である、と信じるようになった。やがて人を殺す戦争を否定する絶対平和が、三浦文学の重要なテーマの一つとなり、多くの作品で「戦争」と「平和」を読者に問いかけた。

そう考えてみると、わたしはこの世に、自分の意志よりも更に強固な、大きな意志のあることを感ぜずにはいられなかった。(94頁)

神の計画が、人間のわたしにわかるわけがなかった。しかし神が愛の方である以上、前川正の死は、それなりに神の定めた時であり、最もよとした終わりであったにちがいない。(233頁)

神は、わたしが結婚するために最も必要な「神への全き信頼」を期待されていたのかも……(297頁)

「いつまた戦争が起きるのかしら、戦争が起きたら、あなたは戦場に行ってしまうのね」そういう会話をしなければならぬとしたら、それは何という悲しいことであろう、とわたしは思った。(108頁)

わたしはこの本を読んで、単なる平和論では、ほんとうの平和が来ないのを感じた。ほんとうに人間の命を尊いものと知るなら、一人一人の胸の中に、残虐な人間性を否定させる決定的な何かが必要だと、わたしは思った。それをわたしは、やはり神と呼ぶより仕方がなかった。(118頁)

「きけわだつみのこえ」の学生たちが、若く清潔であればあるほど、わたしは戦争否定のために、どうしても必要な、神のことを考えずにはいられなかった。(119頁)

平和をば 唯祈るより 術なきか 組織なく気力なき クリスチャン我等(109頁)

今度こそは 迎合クリスチャンで みたくなし 外電は原子戦争の悲惨を伝ふ(109頁)

4. 一人一人に与えられた道・使命＝三浦文学の原点

三浦文学を、「再生」いや「復活」の文学と呼ぶとすれば、『道ありき』の中に、それがごく自然な姿で描かれている。前川正からの「深い配慮の遺書」を受け取った堀田綾子は、「貴重な二人の生活の記録」そして「彼への想い」を歌に詠んでアララギその他に発表して行つたと記している。しかし堀田綾子は、彼が死んだ午前一時十四分に死んでしまいたいような誘惑に引き込まれることもあった、と告白し、「生きようと決意しながら、わたしはやはり死にたかった」と記している。

「そんなある日、わたしのもとに、見知らぬ人々からの何通かの手紙が来たのである」とあるように、鹿児島、岡山、新潟などに住む、胸を病む人々からの便りが届いたのであった。死にかけていた、否、死を再び願った堀田綾子を再生いや復活させるべく、神は彼女がまだ会ったこともない人々の手を動かした、と言うべきであろう。

「前川正の死に、泣いてばかりいたわたしに、神はあらかじめ仕事を用意しておいてくださったのだ。わたしは一人一人に葉書を書き、「さけび」を送った。」

こうして後の、作家三浦綾子の執筆活動(文書伝道)の原型が誕生した。

「わたしは、寄せられた手紙に、一枚一枚祈りをこめて返事を書いた。」